

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 25日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520277

研究課題名（和文） ドイツ近現代文学における「神義論的思考」の変遷

研究課題名（英文） The Transition of the "Theodizee-thought" in the German modern literature

研究代表者

川中子 義勝（KAWANAGO YOSHIKATSU）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60145274

研究成果の概要（和文）：ドイツ近現代文学の展開の中に、「神義論的思考」が恒に、しかし形を変えて存在することを指摘し、それを系譜的に跡づけた。「神義論的な問い」とは、悪や苦しみの意味を問う宗教的な問いであるが、近現代となり世俗化が進むなかでも、人生の意義を問う問いとして、構造を等しくする問いが文学作品の中に受け継がれていることを、修辞の問題として明らかにし、修辞の伝統の内に具体的に跡づけた。成果として公にした著書の一冊で日本詩人クラブ詩界賞を受賞した。

研究成果の概要（英文）：In this research I made efforts to point out the "Theodizee-thought" in the German modern literature. The question, why God is right, changed its form in the secularized period, but it remained as the question of the meaning of the life. The secular question succeeded the religious through the preservation of the figure of speech. From this standpoint I explain the German modern literature as the rhetorical transition of the same question. I published the result as a book: "The question of Theodizee", and was awarded the Prize of the Japan Poets Club.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：神義論・予型論・修辞・批評・ハーマン

1. 研究開始当初の背景

私の研究はそもそも、啓蒙の問題が「宗教」対「世俗化」という通りやすい対立の図式では表し得ないことを明らかにすることから出発した。むしろ「批判」と「保持・形成」の両面に与る宗教伝統の両義性は、啓蒙の時代にとどまらず、そもそも近代ドイツの文

学・思想全体を深く規定していることを指摘した。だがそれはドイツの文学思想が極端に宗教的だということではない。むしろ、宗教の批判やその極端な否定においても、容易に覆されないものが言葉自体の中に受け継がれているのである。各時代の文芸思潮の展開に比べると地味だが、実はその変遷を下支えしつつ、伝統の中に脈々と培われ、時を得て

回帰することば。すなわちその「予型論」的構造にこそ注目する必要があることを、近年の研究では追求し、明確にしてきた。

宗教的伝統に深く根ざした個々の予型像・比喩形象は、ヨーロッパ文学全体の淵源に遡る系譜を形成するとともに、時代時代の言説に深く浸透している。例えば、ヨーロッパ文学史の流れにおける古典主義とロマン主義の関係は、古代教会における正典の成立とその批判の関係に準えられる。正典の形成は教会の伝統の確立を意味したが、それは制度の固定化の批判を胚胎していた。この事態を指し示す聖書の比喩形象「殺す文字」は、やがて文学に予型論的に適用され一つのトポスを導く。すなわち古典主義批判において、規範化し硬化した文芸規範は「殺す文字」すなわち「律法」になぞらえられ、創造的な「活かす霊」に対置される。疾風怒濤やロマン主義等の文学変革運動は、一見世俗的な経過を辿っても、つねにこのような宗教的形象に深く担われている。この「霊と文字」の対置は、既に啓蒙の文脈で、レッシングが理神論的キリスト教を批判する際にも用いられた。こうした時代を超えた修辞や比喩形象の共通の枠組みは、宗教に矛先を向ける伝統批判であっても、それが実は宗教的伝統そのものいかに深く根ざしているかを示すものであり、これを無視したヨーロッパ文学の受容や研究が、表層的にとどまる所以を暗示する。

「予型論」は今日まだ神学や聖書学の関心にとどまっており、日本のみならずドイツにおいても、アウエルバッハなどの一部の例外を除いて、文学研究がこれ顧みることにはなかった。アウエルバッハは、「予型論」が文学の領域に連綿と伝えられていくことを「フィグーラ論」として展開したが、その成果は中世ヨーロッパ・ラテン語系文学の枠内にとどまり、近代文学の問題に積極的に結びつけられてはこなかった。宗教改革という断絶を経たドイツ近代文学に関して、それは一見妥当のように見えるが、上述のように修辞の伝統はそのような断絶をも越えるのであり、私の研究では、その点を指摘し、連続性を系譜的に跡づけようとした。

平成16年度より19年度まで、文部省科学研究費補助金基盤研究(C)を得て、近代ドイツ文学の修辞の核として「予型論」の伝統を浮かび上がらせ、これをヨーロッパ文学の発展という構図のもとに体系的に叙述することに努めた(研究課題名「ドイツ近代文学における『予型論』の系譜」)。具体的には、諸時代の現実を叙述する個々の状況で、宗教や伝統が培ってきたトポスとしての予型 *typos* や比喩形象 *figura* の果たす役割を検証し、「予型論」という文体形式の歴史的展開として跡づけていった。その成果の一部は、これまでの成果を俯瞰的に見渡す視点の提示と

して、2008年3月に刊行されている(中村不二夫との共編著『詩学入門』土曜美術社出版販売刊、451頁)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ近代文学の歴史の変遷の内に広い意味で「神義論 *Theodizee*」と名指すべき目的論的思考が恒に、しかし形を変えて存在することを指摘し、それを修辞の伝統のうちに系譜的に秩序付けることであつた。

「予型論」をめぐる上述の研究経過やその成果に基づいて、修辞論の観点から文学の変遷を包括的に記述することが可能であるか、構想を巡らしたが、そこで、近代初期から現代に近い時代へと辿るにつれて、なお踏まえておくべき問題を認識するに至った。これまでの研究は、複数の予型像や比喩形象を個別的に提示し、それらの修辞的脈絡を言説内在的に提示する。しかし、それはまだ比喩形象の「語彙論」に留まり、その「統語論」たりえていない。極端な宗教批判の言説であれ、伝統保持の言説であれ、表向きの対立を越えた隠れた呼応は、個々の比喩形象の呼応のみならず、それらを統括する意図にも及ぶ。しかし作品全体の意図を押さえた上で、その様式を包括的に叙述するためには、光源となる新たな批評的焦点を要する。文体の呼応は比喩形象という身体においてのみならず、修辞を統御する精神においても検証せねばならない。語りの内容全般にまで及んでそれを価値づける超越論的な視点が必要となる。ことに近現代から現代へ、超自然的なものが没落し、世俗化と呼ばれる現象が広範に浸透していく時代をも扱おうとする時、そうした変遷を導く目的因(目的論的動力因)を闡明し、跡づけることは焦眉の間となる。

叙述を包括する焦点(意図)を名指す仕方にも幾つかの可能性が有る。「予型論」自体が歴史や時代を越えた比喩の呼応と収斂を述べるものであるから、もともと目的論的な比喩形象である。それは広く「目的論的思考」と述べるが、この哲学の術語はあまりに一般的すぎる。しかし「終末論の詩学」(カイザー) また「宗教的秘徴」(ヴィトコフスキ)等の術語では、概念を歴史的に限定しすぎる。本研究では、比喩形象を統括する修辞的焦点とこれへの文体的収斂を、作品を統括する目的論的自己同一化の営みと見なし、「神義論的思考」と呼ぶことにした。「神義論」とは、自然世界の展開や人間の歴史に神が関わる仕方、とりわけ悪の問題に直面して神の義を問う伝統的な問の様式である。悪や禍を恵みの神の表象と如何に結びうるかという、リスボン地震を経験したゲーテの告白が有名で

あるが、その核心には「この世界には意味があるか」という普遍的問いが控えている。神義論とは本来、世界を一義的に意味付ける妥当性への問いである。だが、そのような「意味への問い」は、宗教的文献のみならず宗教を批判する文献をも貫いている。ゲーテだけではない。ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』なども、キリスト教的な語法や比喻形象を、専ら宗教の無力を叙述する為に敢えて多用する。そのような、否定を経た新たな神話形成、詩人の立場からする世界の再神話化は、一義性を固執する点で、信仰篤い宗教言説と実は同一の修辞構造に基づくので、「裏返された神義論」と呼ぶことができる。本研究では、近代を宗教から啓蒙・理性への移行ではなく、修辞論の観点から「神義論」の反転過程と見なした。そのうえで、鏡像・倒立像をも含めた意味での「神義論的思考」を、近現代の言語作品全般を見渡す修辞論的統括視点として位置づけ、その変遷を跡づけることを目的とした。

3. 研究の方法

研究の過程では、研究目的の欄で述べた広義の「神義論的思考」をドイツ近現代文学史という歴史のスパンの中で具体的に指摘し、その変遷を系譜的に跡づけていく一方で、宗教や伝統によって培われた比喻形象などの修辞・文体様式を整理する作業を併行して行い、それらをこの「神義論的」目的論的構図と突き合わせ、秩序づけていくという方法を採った。

問題を修辞論・文体論の系譜と「神義論的」目的論的思考の系譜との交錯として跡づける途は、ドイツでも、また日本のドイツ文学研究でもこれまでまだ顧みられていない。従来の文学史理解の枠組みを批判的に検討し、問題性を指摘しつつ、新たな枠組みを提起する本研究の作業には、先行研究をあまり参照できないことは、当初から予想できたので、個々の作品成立や文書記述の状況に立ち戻って、丹念に具体例を収集し、少しずつ根気よく全体像を組み上げていく努力をした。毎年、夏期にドイツ・レーゲンスブルク大学を中心に出張調査にでかけ、同大学図書館やミュンヘン大学の図書館、国立公文書館などを訪れて資料の収集・参照にあたった。

2008年度は、まず、本研究のライトモチーフとしての「神義論」、すなわち作品を統括する目的論的自己同一性としての「神義論的思考」を厳密に定義づけ、研究の方法論的妥当性を確保しようとした。概念としての「神義論」の認識を深めるために、まず「神義論」の術語を導いたライプニッツの著作に始まり、この概念を楽観的に打ち出す啓蒙主義時

代の物理神学思想(ダーラム)や、修辞的共同体におけるその典型的表現形式となった宗教的抒情詩(ブロッケス、ゲレルト、ハラー)などを考察の対象とし、これらの詩人たちの全体像を獲得するように努めた。

2009年度は前年度の研究をひきつぎ、資料収集を重ねつつその分析を行った。まず、敬虔主義や覚醒運動など、近代各時代の人々が死生観や苦しみの理解を表明する際の比喻の伝統などを、文体の側面から見直したが、その際に、そうした伝統形成の背景を培ってきた宗教改革から19世紀に至る範囲の神学論争なども検討した。併せて、ヨハン・フランク、ヨハン・ヘルマン、パウル・ゲルハルトなど30年戦争時代の詩人たちの苦難の受容を歌う詩篇を、文学共同体の修辞的伝統全体のなかに跡づける作業を行った。

この段階から、本研究の要となる「裏返された神義論」への転換を正面に据えて追求した。18世紀後半から19世紀全般におよぶ歴史発展への楽観論や、ユートピア志向をレッシング、ヘルダー、ラーヴァターなどの思想家、また初期ロマン派の詩人たちを、その先駆形態として跡づけた。こうした対象を扱うに際して、個々の修辞、比喻形象を一旦解体し、目的論的再神話化としてのその言説の総体を価値づける批評方法を採用した。

2010年度も前年度の作業を継続したが、修辞的伝統の系譜的研究が単なる懐古的叙述にとどまらないために、現代の表現に関わる問題についても積極的な意義付けを行った。例えば、ヨッヘン・クレッパー、コンラート・ヴァイス、マリー・ルイーゼ・カシュニッツなどの作品を検証し、そこに先立つ時代と共通する比喻形象の提示を確認した。近代初期から現代へと、伝統の批判や継承において文体や修辞の果たしてきた役割を、広く民衆に関わる様々な文献を俯瞰しつつ明示すること、これをこの年度の主要な作業とした。また10月には、ドイツのハレにおいて開催された「第10回国際ハーマン学会」に参加して、本研究に関わる情報交換や収集を行った。

2011年度は、これまでの調査・研究報告を纏めるべく、友人のガイェック教授他、関連分野の研究者と討議、意見交換を重ねた。また本研究で行った作業方法で達成した部分と、発展的に開かれた展望を統一的視点により把握することに努めた。

4. 研究成果

研究目的の欄に述べたように、本研究は最終的に「予型論」と「神義論的思考」、この二重の主題を纏め秩序づけることを目指した。先立つ「予型論」の研究過程において、隠された予型像や比喻形象を明らかにして

きているので、これを、準備的研究の成果としてまずは用いることができた。一方で、元来神学の術語である「神義論」については、その内包する思考の変遷を跡づける為に、やはりその用いられる修辭的文脈を広範に辿り、ある程度網羅的に秩序づけることが必要になった。その内実を覆う言説は文学・思想に限られず、説教などの記述や民間の説話に及ぶ広大な裾野を有しているの、その言説を文脈も含めて収集、検証するという作業を新たに開始したが、毎年の夏期休暇中に行ったドイツへの調査旅行によって、ある程度満足いく成果を収めることができた。

本研究が追求した、広義の神義論においては、比喩形象の使用の頻度によって、意味への問いの濃淡、問いかける意志の強弱が測られる。それによって、宗教的、反宗教的のいずれを問わず、言説を時代状況の中で同じ土俵に乗せ、その語りを意義付け、時代の脈絡の中に秩序づけていくことが可能となる。ここでは宗教的か否かではなく、時代の枠を越える比喩形象の充填された「重い語り」か、それともそれらの希薄な「軽い語り」かが区別される。世界や生存の一義的意味付けを包含した究極の問いからの遠近が、時代状況の中に言説を位置づける批評的判断基準となる。「神義論的思考」の強度と、比喩形象の総体を統一する意志と情熱の強靱な配慮が、作品を価値づける判断の根拠となる。こうした視点を採ることによって、詩集『神の内なる地上の歓び』に収められたブロックスの文字通り神義論的・護教的な詩篇や、等しく世界の崇高性から神を賛美するゲレルトの詩篇と、同時代のウィリアム・ブレイクの畏怖を湛えた作品「虎」を同じ地平に置き、むしろ後者に「聖なるもの」に直面した「神義論的」な問いの充填を見ることが可能となった。このような把握を纏め、すでに2009年に、研究協力者B・ガイェック教授と共著の形で、『神への問い—ドイツ詩における神義論的思考の由来と行方』（土曜美術社出版販売刊、282頁）を著したが、この書は一般の読者層、ことに詩人たちに高く評価され、2010年には、「日本詩人クラブ詩界賞」を受賞するに至った。

このように予型的比喩形象と神義論的思考という、修辭論の伝統から事柄を言語内在的に捉える把握と、叙述の営為を目的論的自己同一化と捉える批評的視点とを対峙させることによって、近現代、ことに現代に近い時代を跡づけ、最終的に『聖書詩学』の系譜的叙述を導くのが本研究の意図である。通念となった文学史の枠組みを離れ、問題を修辭論・文体論の系譜として跡づけることは、従来の理解の枠組みを再検討するだけでなく、現在の文学表現を解釈する新たな「読み」の契機を導く可能性を提起する。この観点か

ら、暫定的な到達点を、『詩人イエス—ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』として著した（2010年、教文館刊行）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

① 川中子義勝、「〈問い〉と〈呼びかけ〉—宮沢賢治とドイツ文学」、「E R A」第二次8号、査読無、2012、107-115。

② 川中子義勝、「真理の継承—内村鑑三から矢内原忠雄へ」、矢内原忠雄著『内村鑑三とともに』（新装版解説）、査読有、2011、541-552。

③ 川中子義勝、「抒情詩の中の〈私〉について」、「詩界通信」56号、査読無、2011、4-6。

④ 川中子義勝、「〈語りとは翻訳である〉『子供の自然学』執筆をめぐるハーマンのカント宛書簡を中心に、『別冊水声通信 坂部惠精神史の文脈を汲む』、査読有、2011、253-279。

⑤ 川中子義勝、「〈問い〉と〈呼びかけ〉」、「詩界通信」53号、査読無、2011、8-10。

⑥ 川中子義勝、「ひとつの心性の形」、「E R A」第二次5号、査読無、2010、150-151。

⑦ 川中子義勝、「〈ひかりの素足〉における〈問い〉」、「黒の会通信」35号、査読無、2010、2-3。

⑧ 川中子義勝、「矢内原忠雄と教養学部」、東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』（東京大学出版会）、査読有、2010、116-132。

⑨ 川中子義勝、「比喩形象 figura について」、「E R A」第二次4号、査読無、2010、117-119。

⑩ 川中子義勝、「矢内原忠雄の詩」、「E R A」第二次3号、査読無、2009、107-111。

⑪ 川中子義勝、「譬えと予型—二人称の詩学」、「E R A」第二次2号、査読無、2009、92-103。

⑫ 川中子義勝、「J・G・ハーマンにおける〈霊〉（“Geist” bei Johann Georg Hamann. Daimon - Genius - Genie)」、日本独文学会編「ドイツ文学」138号、査読有、2009、91-107。

⑬川中子義勝、「ドイツ宗教詩と世俗化の問題 — 信仰の歌と問いかける詩」、説教塾紀要編集委員会編「説教」10号、査読有、2009、47-66。

⑭川中子義勝／藤井貞和／高橋哲哉／原田道子、「討議・言葉と戦争 — 藤井貞和『言葉と戦争』をめぐる」、『詩と思想』271号、査読有、2009、35-53。

⑮川中子義勝、「矢内原忠雄 — 預言者の悲哀」、「UP」437号、査読無、2009、33-35。

⑯川中子義勝、「藤井貞和頌」、「E R A」第二次1号、査読無、2008、73-76。

〔学会発表〕(計3件)

①川中子義勝、「抒情詩の中の〈私〉について」、日本詩人クラブ例会講演、2011.7.9、東京大学駒場キャンパス内ファカルティハウス・セミナールーム。

②川中子義勝、「〈問い〉と〈呼びかけ〉」、日本詩人クラブ例会講演、2010.9.11、東京大学駒場キャンパス内ファカルティハウス・セミナールーム。

③川中子義勝、「バッハの音楽に見る生と死 — 〈神の時は最良の時〉」、白百合大学キリスト教文化研究所主催講演会、2009.11.10、白百合女子大学。

〔図書〕(計4件)

①鴨下重彦／木畑洋一／池田信雄／川中子義勝 編著、『矢内原忠雄』、東京大学出版会、2011、351。

②川中子義勝、『詩人イエス — ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』、教文館、2010、240。

③川中子義勝／ベルンハルト・ガイェック、『神への問い — ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方』、土曜美術社出版販売、2009、282。

④川中子義勝／中村不二夫、『詩学入門』、土曜美術社出版販売、2008、451。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

<http://www004.upp.so-net.ne.jp/kawanago/DTTOP.HTM>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川中子 義勝 (KAWANAGO YOSHIKATSU)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60145274

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：